

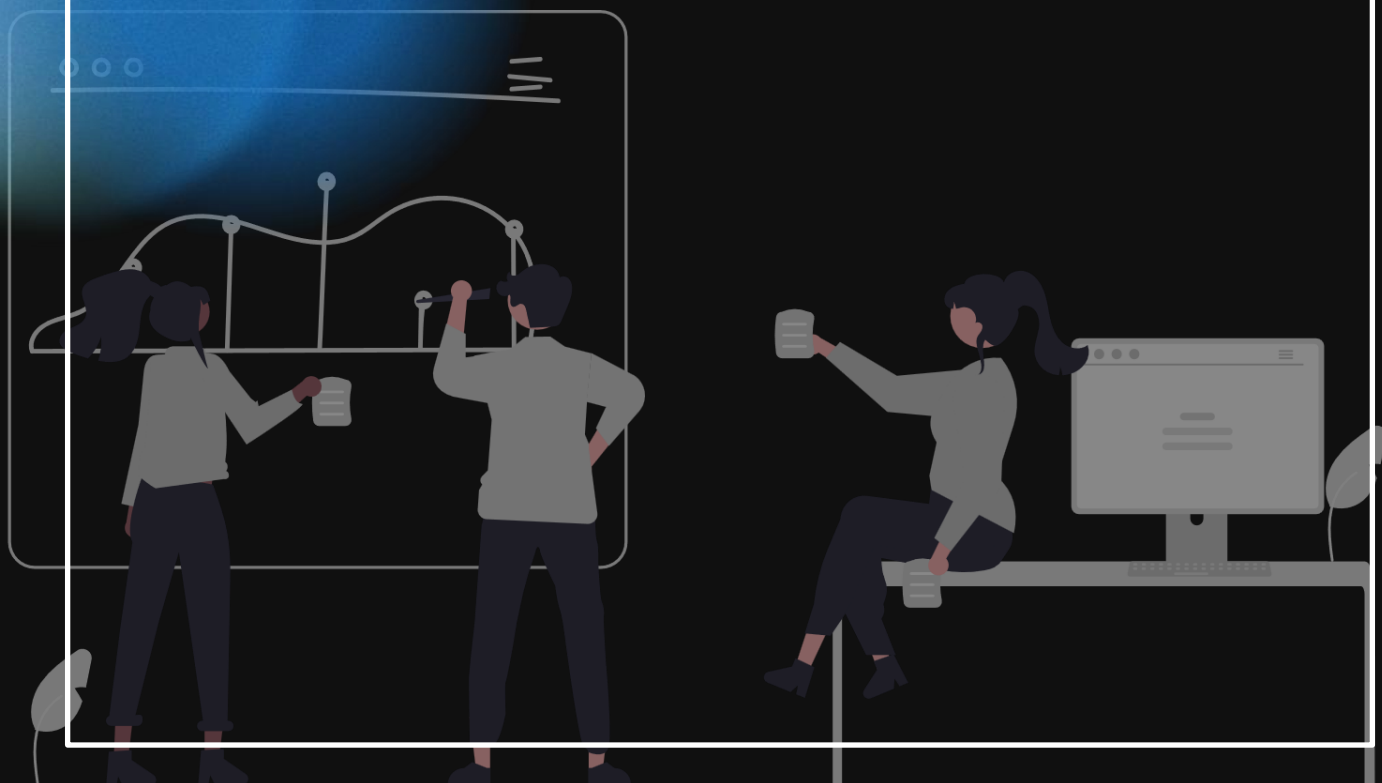
FDD report 2025

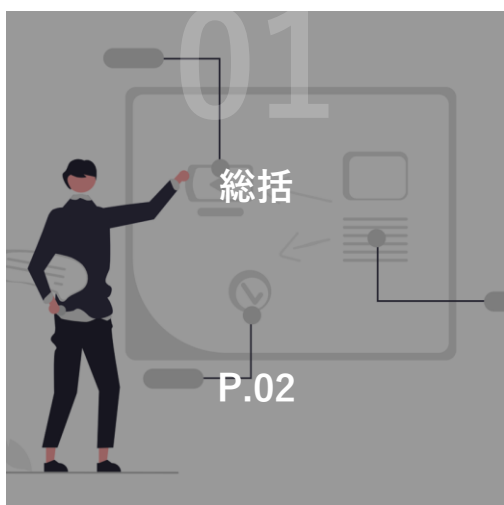
学修者本位の教育 をどう構築するか

Naruto University of Education
Faculty Development Committee



鳴門教育大学 FD委員会





本学は、令和7年度からFD推進体制を刷新し、FD委員会を再構築した。その目的は、主に2つある。

第1は、FD活動に、教員養成大学である本学のミッションと結んだ「プログラムとしてのカリキュラム」（第4期期間に即して言えば、セルフデザイン型学修を中核とした自己伸長型教員養成カリキュラム）と教育実践及び教学IR（成績分布や各種アンケート等）を連動させた教学システム全体の検証・改善につながる機能を持たせること。

第2は、FD委員会と内部質保証のための自己点検・自己評価委員会とを連携させ、教学改革に係るPDCAサイクルを実質化することである。

FD委員会を中心とするFD推進体制のもとで、本年度は「学修者本位の教育をどう構築するか」というテーマのもと、2025年12月2日から12月12日の期間に「FDワークショップ」を実施した。学内教学改革立案者の説明や専門家の講義・講演を聴く「個別学習のFD」から、教育課題に基づく教員間の協働的な対話ベースのワークショップを通じて「教職協働のFD」への転換をめざした。

FDをワークショップ形式で行うことの意義は、①課題を共有する参加者一人一人の意見が尊重されること。②教員養成という目的を共有しながらも専門分野や教育観、学問観を異にする多様なグループメンバーのコラボレーションから生まれる創造性を尊重すること。③あらかじめFD活動の帰結や正解を用意するのではなく、場のプロセスを通して答えを探る姿勢を重視することにある。

ワークショップの考察課題は、①アクティブ・ラーニングの実践、②ICT活用指導力育成科目群の展開、③講義前後の学習（予習・復習）の促進、④課題や提出物への適切な指導、⑤授業内容やその水準、⑥その他考慮すべき教育実践上の課題の6つであった。教員はコース横断で6グループを構成し、上記6課題を適宜取り上げ、ディスカッションしていった。

このグループディスカッションによるワークショップの成果と課題について、第2回FD委員会（2026年3月3日開催）での委員の意見交換を踏まえ、次のように総括したい。

成果：

- ①大学からの押しつけのFDとは違い、教員にとってFD活動への参加のしやすさが確保されたこと。
- ②修士課程の教員と専門職学位課程の教員がともに集い議論できたことで、全学的なFDとしての実感が持てたこと。
- ③論理実証を重んじる教育観や学生や学修環境の状況・文脈・身体性を踏まえて学びをつくりあげていこうとする教育観など相異なる教育観が議論の中でぶつかり合うことで、自らの教育観を捉え直すことができたこと。
- ④対話のための課題が非常にプラクティカルであったので、自らの授業実践に即して内容のある意見を出すことができたこと。
- ⑤水平的な関係性の中でワークショップ（対話）が展開され、大学が進める教学改革について、意義や必要性とともに、一教員として常に批判性をもちながら議論できたこと。

課題：

- ①グループが6つあり、ワークショップのグループ別スケジュールを教員に周知、調整することが難しかった。参加率は63%（教員126名中79名が参加）であったが、スケジュール調整がつかずやむなく欠席した教員もいたように思われる。
- ②Forms等を活用してFD活動に対する事前の情報共有や参加を促す広報をもう少し丁寧に行う必要があった。
- ③ワークショップに参加できなかった教員に対し、資料や活動報告を提供していく必要がある。

FD委員会として、令和7年度のFD活動の成果と課題を踏まえながら、FD推進体制刷新の趣旨に則り、令和8年度のFD計画を立案していきたい。

国が示すFDの方向性及び鳴門教育大学が掲げる「大学が求める教員像」「人事方針」等を踏まえて、令和7年度は「**学修者本位の教育をどう構築するか**」をテーマにFD推進事業を計画した。

教学マネジメント指針 (令和2年1月22日 中央教育審議会大学分科会)

IV 教学マネジメントを支える基盤 (FD・SDの高度化、教学IR体制の確立)

- ・定義：授業内容・方法の改善を図る組織的な研修・研究。
- ・役割：教学マネジメントの基盤、学修成果の最大化に不可欠。
- ・対象：新任から管理職まで、役職に応じた体系的な実施。
- ・改善：IR等の分析結果を共有し、教育改善に直結させる。
- ・発展：院生へのプレFDや、実施状況の公表が求められる。

新たな時代を見据えた質保証システムの改善・充実について (令和4年3月18日 中央教育審議会質保証システム部会)

(質保証を担う教職員の資質能力の向上)

- ・FDについても、遠隔授業等の実践を通じて得られた知見を学内外で広く共有すること等が一層重要。
- ・改善・充実の方向性：大学間等の共同取組を把握・周知しFDの改善・充実を促進する。

令和4年度大学設置基準等の改正

(組織的な研修等) 第11条

- 1 大学は、当該大学の教育研究活動等の適切かつ効果的な運営を図るため、その教員及び事務職員等に必要な知識及び技能を習得させ、並びにその能力及び資質を向上させるための研修の機会を設けることその他必要な取組を行うものとする。
- 2 大学は、**学生に対する教育の充実を図るため、当該大学の授業の内容及び方法を改善するための組織的な研修及び研究**を行うものとする。
- 3 大学は、指導補助者（教員を除く）に対し、必要な研修を行うものとする。

- ・目的：学修者本位の教育実現と質向上。
- ・方法：役職等に応じ組織的・体系的に実施。
- ・連携：教職協働のためSD規定等を集約。
- ・対象：指導補助者への研修を義務化。

令和5年度の大学における教育内容等の改革状況

6-A FDの実施状況

- ・内容：講演会や授業検討会が主流。
- ・組織：約8割がFDセンターを設置。
- ・参加：全教員参加の大学は3割超へ増加。
- ・外部活用：専門家の招聘など学外知見を活用。

鳴門教育大学が求める教員像

教育



学生の信頼に応え、また、本学の理念に則った教育活動を実践し、教員養成に熱意のある教員。

国立大学法人鳴門教育大学人事方針 (令和3年1月14日学長裁定)

育成



教員の資質能力向上を図ることを目的にFD研修等を実施するほか、若手教員を学内委員に積極的に登用し、大学運営能力の育成を図る。

国立大学法人鳴門教育大学 第4期中期目標前文

教育の重点



今後の学習観・指導観の転換を担う教員のあり方として、教師として主体的に学ぶ力を有し、子供の多様性や教育課題の複雑さに対応した教育実践を創り出していく教師（創造的实践者としての教師）の養成をねらいとした教育体系の構築を図る。

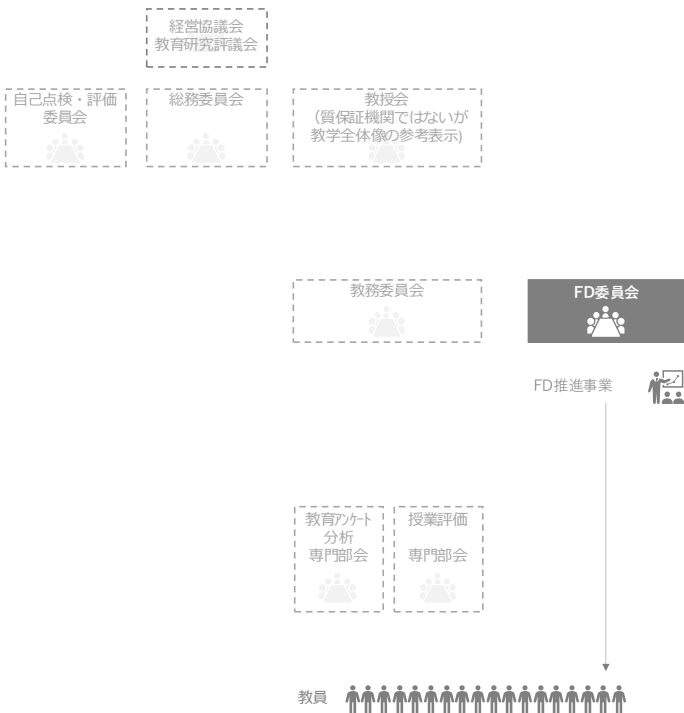
全学DX計画の中で教師としての主体的な学びを支援するシステム（教員養成学修可視化システム）の開発と運用を行い、新たな教員養成のモデルを構築し発信する。

FD推進体制の再構築

「FD 推進体制の再構築に関する TF」による提言（令和6年12月26日／下図参照）を踏まえ、令和7年度からFD委員会は、FDを目的化せず、学内の他機関・教育データ・教員組織と連動して**内部質保証サイクルを向上**させる機能を担った。

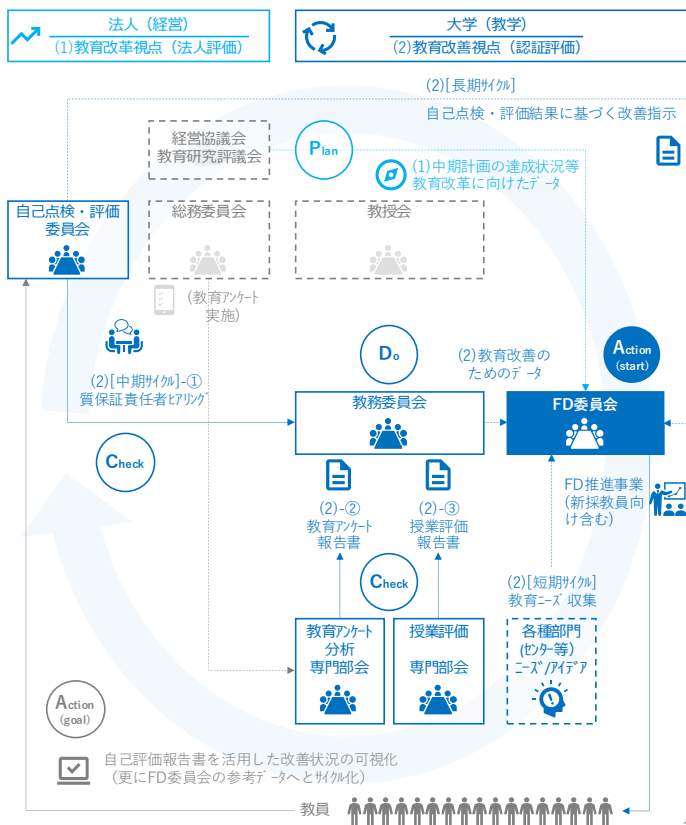
現状 [～R6]

<point> FD委員会：単独でFD推進事業（1年1回90分シブジム）を開催する機関。



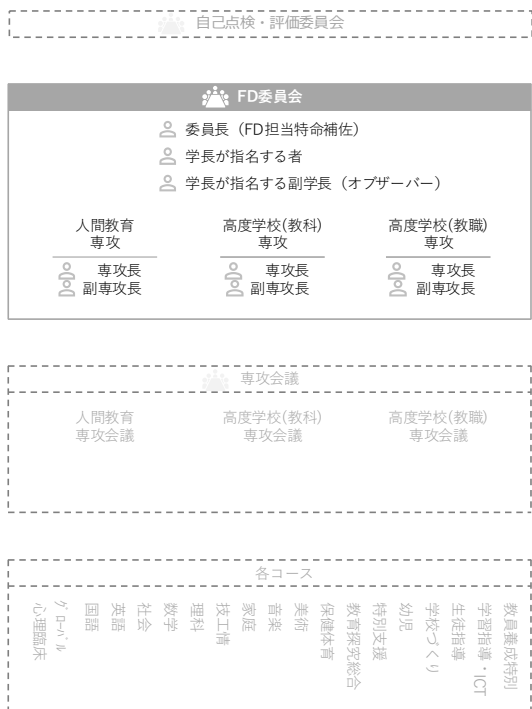
FD (委員会) 再構築イメージ [R7～]

<point> FD委員会：改革・改善の両面から内部質保証サイクルを発展させる[Action]機能のFDを推進。



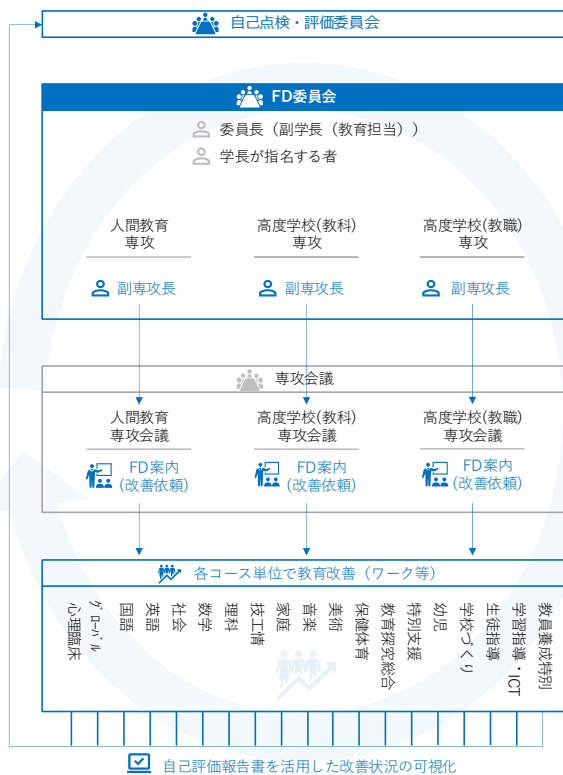
現状 [～R6]

<point> FDが独立的 (目的化) = 教員の能力向上や授業改善 (本来の目的) 状況が不透明。



FD (委員会) 再構築イメージ [R7～]

<point> FDが各コースの自律的な教育改善の起点となる + 組織は改善状況を把握 (内部質保証化)。



FD workshop 2025

学修者本位の教育 をどう構築するか



12.02_[TUE] –
12.12_[FRI]



共通講義B棟

対象者

学内全教員

実施方式

6グループ（各3～4コース横断編成）単位での
ワークショップ・ディスカッション形式

グループリーダー

学校教育学部教務委員会委員（P2参照）

対象データ

- 教育等に関するアンケート報告書2024
- 令和6年度全国学生調査（第4回試行）実施結果
- 授業評価報告書2024

協議テーマ例

1. アクティブ・ラーニング
2. ICT活用指導力育成科目群
3. 予習・復習
4. 課題や提出物への適切な指導
5. 授業内容やその水準

実施報告

- 各副専攻長：FD委員会上で各グループのFD実施結果概要を報告。
- 各コース長：「自己点検・評価報告書（総合評価欄）」上で各コース別のFD実施結果概要を記載。






主催

鳴門教育大学FD委員会

問い合わせ先

教務部教務課教育支援係（DX） 088-687-6194 kdx@naruto-u.ac.jp

グループ		A	B	C	D	E	F
日時		12/08(月) 10:40-12:10	12/10(水) 10:40-12:10	12/02(火) 10:40-12:10	12/12(金) 14:40-16:10	12/10(水) 13:00-14:30	12/02(火) 13:00-14:30
会場		B103	B203	B208	B206	B104	A3会議室
グループリーダー (学部教務委員会委員)		余郷特命教授 (国語) 美井野准教授 (技術)	木口講師 (英語) 小野瀬講師 (家庭)	眞野准教授 (社会) 日下講師 (音楽)	早田准教授 (数学) 家崎准教授 (美術)	福地准教授 (理科) 湯口教授 (保体)	高橋教授 (特支) 木村准教授 (幼児) 江川教授 (実践) 松浦准教授 (特別)
グループリーダーとの大学院窓口 (大学院教務委員会委員)		今田教授 (心理臨床)	岡崎准教授 (グローバル)	大林准教授 (マネジメント)	田村准教授 (総合) 池田教授 (生徒指導)	竹口准教授 (ICT)	

心理臨床コース	○						
グローバル教育コース			○				
国語科教育コース	○						
英語科教育コース			○				
社会科教育コース				○			
数学科教育コース					○		
理科教育コース						○	
技術・工業・情報科教育コース	○						
家庭科教育コース			○				
音楽科教育コース				○			
美術科教育コース					○		
保健体育科教育コース						○	
教育探究総合コース					○		
特別支援教育コース							○
幼児教育コース							○
学校づくりマネジメントコース				○			
生徒指導コース					○		
学習指導力・ICT教育実践力開発コース						○	
学校教育実践／教員養成特別コース							○
テーマ 1.アクティブ・ラーニング	○	○	○	○	○	○	○
テーマ 2.ICT活用指導力育成科目群	○	○	○	○	○	○	○
テーマ 3.予習・復習					○		○
テーマ 4.課題や提出物への指導	○						○
テーマ 5.授業内容・水準			○				
テーマ 6.その他 (AI等)	○	○				○	

実施期間・場所	📅 2025年12月02日(火)-12月12日(金)・共通講義B棟教室等
実施方式	🗣️ 全教員対象／コース横断型6グループ（A～F）別のワーク・ディスカッション形式
ディスカッションデータ	📊 <ul style="list-style-type: none"> ・ 教育等に関するアンケート報告書2024 ・ 令和6年度全国学生調査（第4回試行）実施結果 ・ 授業評価報告書2024
参加率	🕒 👤👤👤👤👤👤👤👤👤 63% (79/126名)

ディスカッション概要



01 アクティブ・ラーニング

導入率ではなく「学びの深化」を基準とする必要性が共有された（A）。また、授業目的に応じた手法の選択と学生の知的好奇心を促す設計が重要である（C）。一方で、学生間の準備状況や背景の差、グループワークにおける参加の偏りといった課題が存在する（B）。そのため、授業内容や受講者数に応じた導入方法（D）や教育段階に応じた設計の違い（F）を踏まえ、学生全員が主体的に関与できる仕組みづくりが求められる（B）。

02 ICT活用指導力育成科目群

「どのような学びを達成するか」という目的に応じてICTを設計・活用する力が重要である（E）。その際、教科特性に応じた思考の深化を損なわない活用（D）や、ICTの活用がcaえって学びを制限しないよう留意しつつ主体的・対話的な学びを実現する視点（C）が求められる。また、リスクへの倫理的配慮（A）や、AIの普及を踏まえた評価方法の再検討（B）も不可欠である。これらを踏まえ、情報モラル・著作権を含む安全指導力に加え、目的に応じた適切なICT活用とその評価を行う指導力の育成が必要である（F）。

03 予習・復習

学修時間確保のため、指示の具体化と見える化が鍵である。コースごとの多様な考え方を背景に（D）、学部では語句調査や資料提示、大学院では全課題の事前提示など、教育段階に応じた工夫が共有された（F）。また、Moodle等のICTを活用したルーティン化や「1単位45時間」の明示による意識改革も有効である（F）。

04 課題や提出物の指導

フィードバックは教育の核となるが、大人数授業の個別返却は負担が過大なため、共有型への転換を示唆（A）。フィードバックは個別と全体の二層構造が理想。少人数では即時的な対話を重視し、大人数ではICTや全体講評で負担軽減と質を両立する。規模に応じた工夫が、学生の学びを深める教育の核となる。（F）。

05 学びに資する授業内容・水準

知識習得に留まらず、体験や実践を通じた深い理解の形成を目指す。課題として、学生間の意欲や準備状況の差、グループワークにおける貢献度の偏りが挙げられたが、これに対し、アサインメントの工夫や学生同士の「相互評価」の導入が有効な改善策として示された（B）。

06 その他（AI等）

AI利用の拡大に伴い、教育の意味や評価方法そのものの見直しが求められている（B）。その中で、答えを出すこと以上に、プロンプト作成力や批判的思考力といった人間の判断力・創造性が重要である（E）。さらに、シラバスとアンケート回答が機械的に一致する構造の是正や、教員負担と学習効果のバランスを踏まえた持続可能なフィードバック設計など、実態に即した評価・授業設計への転換が課題である（A）。

1. 授業におけるアクティブ・ラーニングの実施のあり方

各教員が実施する授業において「アクティブ・ラーニング」をどのように進めているか。また、各授業でのアクティブ・ラーニングの実施割合を高めたり、学生のアクティブ・ラーニングへの理解を高めていくためには、どのような取り組みや手立てが必要か。

Group A

- 演習・朗読・模擬授業等を通じて実施している。学生に説明させる、模擬授業的役割を与える等、受け身ではない授業形態が複数例示され、実践共有として肯定的に扱われた。
- 一方で「数字（割合）を議論しても妥当な評価にならない」「アクティブ・ラーニングが馴染まない授業も存在している」ことが確認された。
- 導入率や実施率といった数字評価では教育効果を測れず、授業特性に応じた適用と深度を基準とすべきとの認識が共有された。

Group B

- 少人数のグループでディスカッションや比較分析を行い文法の考え方を深める。模擬授業の作成発表を通じて指導力を養う。体験型学習を重視し、実習や見学、ディベートなどを取り入れ学生の主体性を引き出している。
- 課題は、学生の準備状況や背景の違いによる学習効果の差がある。
- グループワークで全員が積極的に参加できる仕組みづくりが求められる。

Group C

授業の目的に応じて適切なアクティブラーニングを取り入れることの必要性や学生の知的好奇心を満足させるような授業を実施するにはどうすればよいかなどについて意見が交わされた。

Group D

授業内容や受講者の人数との兼ね合いによるアクティブラーニングの組み込み方、学習がアクティブになる対他、対自の方向の違いについて、各コースから意見が出された。

Group F

- 授業内で行われているアクティブ・ラーニングの方法
 - ・グループワーク／ディスカッション系・模擬授業・模擬保育・ロールプレイ系
 - ・ケーススタディ・事例検討系・個人での思考・振り返り系
- どの領域の工夫を意識しているか
 - 「学部」 活動中心・演習主体のAL（模擬保育・模擬授業・教材づくり・学生経験の共有
 - ・アイスブレイク・グループワーク多数）
 - 「大学院」 事前準備＋高度なディスカッション（事前レポートと事前コメント・IWBでの討議・発表者は読み上げをしない・テーマごとの深い討議）
- 授業者の悩み／課題
 - 学生が発言しやすい場の設定に悩む（アイスブレイクの重要性・学生の多様性への配慮）
 - 教員が話しすぎてしまう課題（「待つ姿勢」を意識したいという声）
 - ICTツールが苦手な学生への配慮（ホワイトボード操作の練習時間を設ける）

2. ICT活用指導力育成科目群の授業の内容とその実施方法

各コースが担当するICT活用指導力育成科目群」の授業において「「教員に求められるICT活用指導力」をどのように捉えて、どのような「目標」と「学習内容」を設定し、授業を実施しているか。また、「学習内容の難易度」「目標」等についてどのように改善をしていくか。

Group A

○ICT導入に関する根本的懸念
子どもがSNS・オンライン環境に晒される危険性（誹謗中傷・詐欺・性犯罪・闇バイト等）が実例として挙げられ、便利さの論理で子どもが保護されていない現状が倫理的問題。
○ICT導入に伴う教育的・倫理的危険領域
年齢制限の必要性、SNS接触制御、保護責任が明確に確認され、利便性より発達段階と安全確保を優先すべきとの一致がみられた。

Group B

AIの利用が増える中で、教育の意味や評価方法を見直す必要がある。
(筆記試験やAIが解けない課題設定など)

Group C

○対面の授業においてどのようにICTを活用するかについて意見が交わされ、特に実習中の学生などは、パワーポイントに頼りすぎること、有機的な学びがむしろ阻害される場合などもあり、ICTの活用がICTによる制限にならないよう気をつける必要性などが議論された。
○Moodleを活用してテーマについて議論させる授業や、チャットシートを活用した双方向の学びの例などが紹介された。一方、生成AIを使ったと思われるレポートを提出する学生も散見されるようになり、どうすれば主体的で対話的な学びが実現できるのかについて意見が交わされた。

Group D

ICTの特性を活用しやすい教科と、効率向上には役立つが本質的な思考の深化には逆の効果をもたらしかねない教科もあるという意見が出された。

Group E

○ICTの定義と範囲
単なる情報機器の使用ではなく、「どういう学びを作るか」という目的から考えるべき。教科ごとの特性を踏まえ、どのような学びを達成したいかに応じてICTを活用する力を学生につけることが目標。
○ICT活用実践
・実験データの処理とプレゼンテーション資料作成（複雑な図や動画をQRコードから取得し授業の効率化・生徒が実験データを入力し、教師がリアルタイムでデータを確認・分析できる環境構築）
・動画撮影による技能の振り返りやデータ共有（GPSアプリで移動の学習・心拍センサー活用）
○今後の課題
・学校現場の制約（デバイス使用制限、予算）と大学教育のギャップをどう埋めるか
・AI活用の適切な指導方法と評価基準の確立
・学生のプロンプト作成力と批判的思考力の育成方法
・データプライバシーとセキュリティに関する学生への教育

Group F

○共通：ICT活用の必然性を理解し、目的に応じて使い分ける力。児童生徒・幼児が主体的にICTを活用できるように指導する力。情報モラル・安全・著作権等の指導力。授業準備・教材研究・評価など実務でICTを活かす力。
○固有：学力保障中心・AI使用・情報の信頼性が強調される・障害特性に応じた道具としてICTを使い分ける力・生活の不自由さを補完する手段としてのICT・直接体験を尊重しつつICTを補完する等

3.各授業における学生の予習・復習のあり方

各教員が担当する授業における学生の予習・復習についてどのように取り扱っているか。
また、どのようにして、予習・復習への取り組みに対する学生の意識や認識の改善を図っていくか。

Group D

予習復習に関する各コースの多様な取り組みや考え方について意見交換がなされた。

Group F

- 教育段階(学部・院)による違い
学部：予習の具体化(資料配布・語句調査・課題準備)
大学院：事前に全課題を提示し、計画的に自律学習できる環境づくり
学生の経験差(現職/ストレート)に応じて内容を変える工夫
- 予習・復習に対する考え方
 - ・「予習・復習より課題中心」という意見もあり
 - ・「1単位=45時間」を明示して学生の学修時間を意識させている
- 予習・復習=“具体化”と“見える化”が鍵
指示が明確で、授業内で使われると、学生の取り組みは強化される。
- ICT活用とルーティン化が進んでいる
Moodle提出、資料共有、振り返りシートなどの仕組み化が広がっている。
- 学びを他者に説明(発表・ディスカッション)する機会が予習・復習機能を果たしている。
予習した内容の共有、復習としての振り返り・議論があるため、学習効果が高まる。

4.授業における課題や提出物への適切な指導のあり方

各教員が実施する授業において学生に課す「課題」等の提出物についてどのような指導を行っているか。
学生の力量形成とそれに伴う満足度の向上のため、どのような対応が有効であるのか。

Group A

- ・大人数授業の場合、全員個別への返却は労力的制約が大きく、従来型の個別返却は「効果に対して負荷が過大」
- ・個別返却のみならず、投稿共有型フォーラム形式を通じて「全体で読む・全体に返す」仕組みに転換し、フィードバックを学習共同体の共有資源とする試みを紹介
- ・共有型フィードバックや段階的応答など、持続可能性を見据えた設計転換の必要性
- ・フィードバックは評価補助ではなく応答そのものが教育行為であるという確認
- ・コメント量や返却形式に関わらず、教員からの応答の有無が学習者形成に直結する教育的核として位置づけられ、負荷と持続可能性の両立が課題

Group F

- ・フィードバックは「個別+全体」を組み合わせることを重視
- ・少人数授業では、対面・口頭による対話的フィードバックが中心
- ・発表・ディスカッションと教員コメントを組み合わせた授業設計
- ・授業中や直後の即時フィードバックにより理解をその場で促す
- ・提出物を匿名化し、授業内で共有・講評する実践
- ・個別フィードバックでは肯定的評価を意識的に含める
- ・提出後は、学修内容の記憶が新しいうちに迅速に返却している
- ・Moodle等のICTを活用し、個別コメントや記録性を高めている
- ・大人数授業では全体講評が中心となり、個別対応が難しい
- ・大規模授業における現実的で効果的なフィードバック方法が課題である

5. 学生の学びに資する授業内容やその水準のあり方

各教員が担当する授業の講義内容のレベルについて近年の受講学生の受講の様子や成績等からどのような状況であるか。学生の満足度を高めるためにはどのような改善がはかれるか。また、その際に留意しなければならないことは何か。

Group B

知識の習得に留まらず、体験や実践を通して学生の理解につなげることが重要

課題点

- ・グループワーク時グループ内での貢献度の差
- ・準備不足や意欲の低さ
- ・学生の準備状況や背景の違いによる学習効果の差

改善策

- ・学生同士の相互評価を取り入れる
- ・改善案としてはアサインメントやフィードバックを工夫

6. その他

各教員が実施する授業においてテーマ例以外の課題とその解決策

Group A

問題点：

- ・シラバスを学生が読まず、アンケート回答だけが先行している
- ・「シラバスと現実の回答が機械的に一致してしまう構造」への懸念

実態に即した評価設計への見直しが必要

問題点：

- ・大人数授業において全員個別返却は教員側の負荷が大きい一方で、個別返却が必ずしも学習成果へ直結するとは限らず、量と労力が釣り合わないという認識が共有された。

共有型フィードバックや段階的応答など持続可能性を見据えた設計転換が必要

コメント量や返却形式に関わらず、教員からの回答の有無が学習者形成に直結する教育的核
教員の負荷と持続可能性の両立が今後の課題

Group B

AIの利用が増える中で教育の意味や評価方法を見直す必要がある（筆記試験やAIが解けない課題設定など）

Group E

AI活用の実践例：

- ・子供の振り返りテキストをAIでカテゴリ化する研究的活用
- ・器械運動で「できない技」を入力するとAIが練習メニューを提案する

AI活用の懸念：

- ・多くのAIサービスが中学生以上が対象となっており年齢制限の問題がある
- ・個人アカウントでの入力AIの学習に使用されるためデータプライバシーとセキュリティの問題がある
- ・学生がAI生成レポートを提出する問題がある。対応としてプロンプトの提出を求めている事例もある。
- ・生成文章の判別が困難である
- ・AI関係の学会で全データが公開された事例などセキュリティ事故の問題がある。
- ・AIの適切な使い方が線引きとなっている

AI時代の教育：

- ・AIは既存の実績を基に答えを出すため、新しいものは生まれにくい
- ・「アイデアを出す」「プロンプトで壁打ちしながら精緻化する」「内容の質を判断する」といった人間のオリジナリティが重要
- AIを使いこなすプロンプト作成力、AIに判断を委ねない批判的思考力が重要
- 論文の内容や表現方法は、内容の価値自体は人間が創出すべき

※鳴門教育大学HP及び学内ポータルサイトから FD機能を含む活動を集約。

※情報体系は機関別認証評価におけるFD状況に係る提出様式を踏まえている。

取組	主催	実施内容・方法
新任職員研修	総務課労務係	日時：令和07年04月02日 方法：対面（F会議室） 趣旨：大学に採用となった教職員が、大学の理念及び達成すべき諸課題等について理解し、職務遂行上必要な基礎的知識・倫理観を学ぶ。
第50回鳴門教育大学教育・文化フォーラム	教師のためのAI・DS研究開発センター	日時：令和07年07月30日－08月08日 方法：オンデマンド型 趣旨：「データとともに歩むこれからの教育の可能性」をテーマとして、教育データサイエンスの活用方法について解説などを行い、AI・DSを活用した教育について学ぶ。
合理的配慮に関する教職員研修会（心のサポーター養成講座）	学生なんでも相談室	日時：令和07年10月22日 方法：対面（F会議室） 趣旨：正しい知識に基づき、身近な人に対して、傾聴を中心とした支援を行う「心のサポーター」を養成する機会。
合理的配慮に関する教職員研修会	学生なんでも相談室	日時：令和07年11月26日 方法：対面（F会議室） 趣旨：全ての学生にとって学びやすいキャンパスとなるよう、多様性について考え、1人ひとりの在り方を考え、多様性、合理的配慮について理解を深める機会。
FD workshop 2025	FD委員会	日時：令和07年12月02日－12日 方法：原則対面（共通講義B棟） 趣旨：コース別に6グループに分かれ他コースの教員とディスカッションを行うことでそれぞれの課題について検討しよりよい教育にする方法を考える機会。
EDU DX CONFERENCE 2025	教員養成DX推進機構	日時：令和07年12月20日－21日 方法：オンライン（メタバース）と対面（共通講義B棟） 趣旨：学内教職員及び学外参加者が、教育DXを考えるため、生成AIをはじめとする先端技術を活かした教育、GIGAスクール構想の今後について学ぶ機会。
情報セキュリティセミナー	情報基盤センター	日時：令和08年02月27日 方法：オンデマンド型 趣旨：教職員及び学生が情報管理についての知識や意識の向上を図る機会。

氏名	職名	備考
梅津 正美	副学長 (教育・改革担当)	委員長
田中 大輝	副専攻長 (人間教育専攻)	
原田 昌博	副専攻長 (高度学校教育実践専攻 (教科・総合系))	
栗原 慶	副専攻長 (高度学校教育実践専攻 (教科・総合系))	
塩路 晶子	副専攻長 (高度学校教育実践専攻 (教職系))	
山田 芳明	特命補佐 (学部教育・連携教職課程担当)	
幾田 伸司	教授 (高度学校教育実践専攻 (教科・総合系))	

